

『別れのブルース』は大ヒット。声の極みが満天に響めいた。本物の声音が認識された瞬間だった。

文 山川智

青森の豪商の家に生まれながら、破産によって辛酸を紙めた。

母と妹と共に上京し、

東京音楽学校でピアノを学んだ。

声楽の資質を見出され、オペラ歌手に転向、

クラシックの基礎を学んだ。

が、生活は厳しかった。

生計のために裸婦モデルをした。

雪も恥じらう白い肌に包まれていた。

才能は群を抜いていた。

十年に一度のソプラノと絶賛された。

クラシックでは暮らしが立たなかった。

流行歌を歌い、

日本のシャンソン歌手第一号となった。

日中戦争勃発の昭和12年、

『別れのブルース』が大ヒット。

以後、「ブルースの女王」と称賛された。

昭和28年、紅白歌合戦に初出場。

いきなり紅組トリを務めた。

空前絶後であった。

歌を愛し、エセ歌手を認めず

「歌手でなくカス」と言い放った。

威風堂々とした人生であった。



## 昭和歌謡 誕生物語 【第20曲目】

### —別れのブルース—

淡谷のり子

昭和60年代の初頭、当時アイドルとして一世風靡していたのが松田聖子。フジテレビの楽屋で、「松田聖子の歌をどう思いますか？」と聞いた私に、淡谷のり子は一言。

「なんですかねえ、あの人は？ ニワトリが首を絞められたような声を出してええ、あれが歌い手の発声ですか！」

その時のやりとりが、今もお強烈に印象に残っている。

青森県の豪商の家で生まれた彼女は10代の頃に実家が破産し高校を中退。上京して音楽学校に入るものの、生活が困窮し、休学して絵画の裸婦モデルなどして生活費を稼いだこともあった。

そんな彼女が家計を支えるため、ポリドールからデビュー盤『久慈浜音頭』を発売したのは昭和5年(1930)のことだった。その後、コロムビアへ移籍。映画主題歌を中心に外国のポピュラーソングを吹込み、昭和10年(1935)『ドンニャ・マリキータ』で、日本のシャンソン歌手の第1号となる。そして、服部良一が作曲した本格的なブルースとして発売したのが『別れのブルース』だった。案の定、今までの歌謡曲にない斬新なリズムがウケ、大ヒット。ところが、日中戦争が勃発すると軍部の言論統制に遭い、「帝国日本にふさわしくない音楽」として彼女の楽曲もターゲットに。だが、彼女は怯まなかった。慰問に向かう際には「もんぺ

なんかはいて歌っても誰も喜ばない」と、禁止されていたパーマをかけ、「ドレスは歌手にとって戦闘服」との信念の元、大量の始末書とともに死地に赴く兵士たちの心を慰めながら歌った。

晩年はフジテレビ「ものまね王座決定戦」の名物審査員として活躍。だが、藤山一郎や服部良一などの「戦友」が次々に逝く中、自身も脑梗塞で倒れ、平成11(1999)年9月22日、満92歳で静かに天国に旅だった。

圧倒的な声量と音楽的な基礎に裏付けられた自信。加えて激動の時代を生きた抜いた自負が、彼女の歌声を「本物のブルース」に仕上げたに違いない。

しかし、ご本人は「ブルースの女王」と呼ばれることがお気に召さなかったようで、

「安っぽくてイヤな言葉ね。私、ジャズもシャンソンも好きだし、クラシックも歌いたいし……。だから、『のりちゃん』でいいわよ！」

そう微笑む彼女のお茶目な笑顔が今も忘れられない。

山川智●1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 JYJを行く』『共にイースト・プレス』『ビューマンドキュメント 幸せのきずな(リーブル出版)など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介(スターツ出版)』『デキる社員』『狂食ギヤル』(共にイースト・プレス)など多数。